

28年6月研修会
「矢田丘陵・歴史散歩」

資料

奈良・人と自然の会

歴史文化クラブ
(6月14日(火)・雨天中止)

行程表

8:45 近鉄・近鉄学園前駅南口 集合

バス：㊸系統・若草台行き 9:02発 丸山橋 9:14着
(若草台行きバスは、富雄駅発9:05、大和郡山駅発 9:05 でも、OKです。)

*コース (歩行距離：約8km)

丸山橋→富雄丸山古墳→矢田遊びの森→東明寺

→三の矢塚→矢田坐久志玉比古神社→矢田寺

バスで近鉄大和郡山駅へ(15時頃 近鉄大和郡山駅前で解散)

矢田丘陵歴史散歩

(出典: 檀考研友史会史跡地図)

古代の矢田郷

『倭名抄』によると、大和国添下郡には、村国・佐紀・矢田・鳥見郷があった。佐紀郷は平城京の北方域であり、矢田郷は大和郡山市西部、鳥見郷は鳥見川（富雄川）に沿った地域である。平城京の南城で、現在の大和郡山市々街地がほぼその郷域であろう。

明治21年、矢田・山田・城・新・外山の5村をあわせて矢田村が成立したが、古代の矢田郷はさらに広範囲であったらしい。それは、元慶3年（879）5月27日の「大和国矢田郷長解」（『平安遺文』173号）によると、添下郡京南五条一里三十四坪が矢田郷内に含まれるからである。この坪付の地は、大和郡山市丹後庄の東方で佐保川沿いの地である。それで古代の矢田郷は、村国郷の西方及び南方に広がっており、矢山・小泉・丹後庄を結ぶ範囲内であることが判明する。大和郡山市新木は、矢田郷内に含まれる可能性のあることを、ここで注意しておきたい。

さて矢田郷の開発は古く遡るが、和銅3年（710）3月の平城遷都後は平城京に接するところから、開発も一層進んだ。

矢山郷内に存在した古代寺院に、頭陀院・頭陀尼院・金剛山寺（矢田寺）・東明寺・松尾寺などがある。頭陀院及び尼院は、『行基年譜』によると、天平9年（737）、行基が70才の時矢田岡本村に建立したもので菩提院とも呼ばれた。金剛山寺は天武天皇の本願で、天武8年（679）に僧智通が建立したと伝える。東明寺は、持統7年（693）に、舎人親王が創建。松尾寺は、養老2年（718）に、舎人親王と法隆寺僧永承が共に創建したという。頭陀院及び尼院はさておき、矢田郷内の古代寺院が平城遷都以前の建立とされ、天武天皇の皇子である舎人親王の創建と伝えるのは一体何故だろうか。

ひとつには、矢田郷の地が、富雄川沿いの砂茶屋・傍示を経て、河内国に至る要衝であったことが考えられる。しかしそのみでは十分でない。ここで想起されるのは、天武朝に新城に都をつくらうとしたことである。新城は、先に注意しておいた大和郡山市新木を宛てる説が有力である。

『日本書紀』によれば、天武5年（676）、新城に都をつくらうとして、その範囲内の田圃は、公私を問うことなく全て耕さずにおいたので、悉く荒れてしまった。そのために遂に都をつくらなかったという。天武11年（682）3月1日、三野王や宮内宮（後の宮内省に相当）の大夫らを新城に遣して、その地形を見させており、都をつくる機運が盛りあがった。同月16日、天武天皇は新城に行幸している。その後、何らかの事情によって都はつくられなかった。金剛山寺の本願が天武天皇であり、天武8年に建立されたとの寺伝は、天武天皇が新城に都城を築こうと考えていた史実と見事に一致する。

新城の地において、一応の京域が計画され、その計画に沿う形で金剛山寺が建立されたのであろう。舎人親王が新城に都せんとした天皇の遺志を継ぐために、天皇ゆかりの地に寺院を建立したと推測する事もできる。

（参考）新木山（にきやま）古墳：

近鉄郡山駅の南西、西ノ京丘陵の南端に新木山古墳がある。前方部を南西に向けた前方後円墳で、盾形の周濠や外堤の痕跡をよく残している。全長120m、後円部径72m、高さ11m、前方部幅75m、高さ9mで、西側くびれ部には作り出しを有する。現在、墳丘は陵墓参考地となっていて、埋葬施設や出土遺物については知られていない。

1. 富雄丸山古墳

墳丘は自然地形を利用した南北径 102m 高さ 12m の円墳で南北方向に造り出しが付設する。2 段に築成されている。各段には埴輪、葺石が見られる。墳頂部に、南北 12m 東西 8m の墓墳がうがたれ、その中央部に長さ 7m 以上、幅約 1m に近い割竹形木棺が安置されていた。棺は明時代以降 3 度以上に亘る盗掘によって壊されていた。出土遺物類は各地に散失したが、これらの遺物の内、斧頭形石製品 9、刀子形石製品 1、鏃形石製品 1、琴柱形石製品 1 2、碧玉盒子 2、管玉 1 7、有鉤形銅製品 1、銅板 2 が伝富雄丸山古墳出土品として重要美術品に指定され京都国立博物館に保管されている。その後の調査で鉄刀、鉄剣などの武器類や鎌、鋸、斧、鍬先などの農耕具類、碧玉製鍬形石製品や管玉などの玉製品が出土している。

2. 東明寺

かぞうざんとうみょうじ

鍋蔵山東明寺ともいう。開基は舎人親王という。享保 9 年 (1724) の金剛山寺明細帳覚には、東明寺は矢田寺の触下にあるという。境内には本堂と七重塔 (鎌倉末期) がある。木堂は享保年間の再建で、軒下の彫りものがすばらしい。木造薬師如来坐像、木造地蔵菩薩坐像、木造毘沙門天像、木造吉祥大立像はいずれも平安時代で重文。他にも多くの仏像、寺宝があるが、大部分は博物館へ寄託中。

3. 矢田坐久志玉比古神社

横山集落に鎮座する。祭神は櫛玉饒速日命、御炊屋姫命。俗に矢落明神という。神名帳に 2 座ある。本殿は室町時代の一間社春日造、桧皮葺で重要文化財。末社の八幡神社社殿は鎌倉末期の一間社春日造で桧皮葺。小社ながら古風で、重要文化財。

4. 金剛山寺 (矢田寺)

矢田山と号し矢山寺ともいう。護国寺本「諸寺縁起集」に「大和国添下郡金剛山寺、字矢 (田) 寺者 天武天皇御持僧智通僧正 奉為 天皇御願円満所建立也」とある。もとは十一面観音を本尊として、のち地蔵菩薩を本尊として栄えた。

江戸時代には 20 ヵ坊があった。現在は塔頭として北僧坊、南僧坊、念仏院、奥之院。蓮花院、水之坊、大門坊が残っている。本堂、講堂、鐘楼、十王堂、春日神社などがある。寺宝も多い。国の重要文化財に絹本著色矢田地蔵縁起三幅 (鎌倉時代)・木造地蔵菩薩立像 (平安前期)・木造阿弥陀如来立像 (平安後期)・木造十一面観音立像 (平安後期)・木造地蔵菩薩立像 (平安後期)・木造閻魔王倚像 (鎌倉後期)・木造司録坐像 (鎌倉後期) がある。北僧坊の木造虚空蔵菩薩坐像と南僧坊の木造毘沙門天立像も同じく国重要文化財。

矢田寺本尊の地蔵菩薩は錫杖をもたないのが特色である。地蔵信仰の発展に伴ない信仰する人々も増加し、4 月第 3 日曜日のおねり供養は、奈良に残る三大おねりの一つ。8 月 23、24 日の地蔵会式は賑わう。あじさいでも有名。

本尊の地蔵尊には、満慶上人 (満米上人) という人と小野篁との師檀のちぎりにはじまり、閻魔王宮の物語が元享釈書にあり、次のように当寺と地蔵菩薩の関係をとく。「前略……それが中に、法師ひとり焰にこかるるありけり。いかなわばにや、身に三衣をまとひながら、かく苦にせめらるるといへば、地蔵菩薩なり……」とあり、のち 5 尺の丈の地蔵を作り、これを本尊とした。

本堂は解体修理が加えられて、創業当時の美しさが戻っている。

饒速日命と矢田坐久志玉比古神社

(中井弘)

饒速日命の降臨伝説

饒速日命は天照大神の孫で瓊瓊杵尊の兄にあたり、大神の詔を受けて高天原より豊葦原中国に降臨された。天照大神から呪力を持った瑞宝十種を授かり、32人の将軍(子息・天香語山命など)と25人の物部氏族(肩野物部、鳥見物部など)、船長や水主などの大部隊での降臨である。

天の磐船に乗って河内国河上嗒ヶ峰(いかるがのみね:現在の生駒山)に天降り、その後、鳥見白庭山に遷られた。土地の豪族である長髓彦の妹・三炊屋姫を妃とされ、長髓彦と共に大和・河内地方の開拓に着手された。饒速日命は長髓彦と共に神武の侵攻軍と激しく戦ったが、最後は長髓彦を殺害して神武に帰順した。

神武東征と饒速日命・長髓彦(日本書紀(巻第三 神武天皇・神日本磐余彦)の記述)

・神武は東征出発に際して塩土の翁に聞くと、『東方に良い土地あり、青い山が取り巻いている。その中へ天の磐船に乗って飛び降った者がある。思うにその土地は大業を広め、天下を治めるに良い所で、きっとこの国の中心地であろう。その飛び降った者は饒速日という者である。そこに行って都を造るにかぎる。』

・「皇軍は生駒山を越えて中つ国に入ろうとした。そのとき長髓彦はそれを聞き、『天神の子がやってくる訳はきっとわが国を奪おうとするのだろう。』と全軍を率いて孔舎衛坂で戦った。」

・「皇軍は(熊野から大和に入って長髓彦軍と)戦いを重ねたが、なかなか勝つことが出来なかった。そのとき急に空が暗くなり雹が降ってきた。そこへ金色の鵄が飛び来たり、天皇の弓の先にとまった。その鵄は光り輝いて、雷光のようであった。このため長髓彦の軍勢は力戦できなかった。皇軍が瑞兆を得たことから、時の人は鵄の邑と名付けた。いま鳥見というのは訛ったものである。」

・「長髓彦は使いを送って天皇に言上し『昔、天神の御子が天の磐船に乗って天降られました。櫛玉饒速日命といい、我が妹の三炊屋媛(みかしきやひめ)を娶って子が出来ました。それで手前は饒速日命を君として仕えています。いったい天神の子は二人おられるのか。どうして天神の子と名乗って人の土地を奪おうとするのですか。手前が思うにそれは偽物でしょう。』

・「天皇は言われた。『天神の子は多くいる。お前が君とする人が本当に天神の子ならば必ずしるしの物があるだろう。それを示しなさい』と。長髓彦は天皇に饒速日命の天ノ羽羽矢とかちゆき(矢の携行籠)を示した。天皇はご覧になって「偽りではない」といわれ、自分の天羽羽矢とかちゆきを長髓彦に示された。長髓彦はその天神のしるしを見てますます恐れ畏まったが、戦いの用意はすっかり構えられ、改心の気持ちはない。饒速日命は、天神と人とは全く異なるのだということを教えても判りそうもないことを見てとり、彼を殺害して部下たちを率いて帰順された。これが物部氏の先祖である。」

メモ①：古事記では登美毗古を平定した後、邇芸速日命がやって来て「天津神の御子が天降りされたと聞いて、後から追いかけて天降りしたものです」と言って印を差し上げて家来となった。とあり日本書紀との重要な相違である。

メモ②：旧事本記では、饒速日命が亡くなって息子の「宇麻志麻治」が大和を統治していたが、長髓彦を殺害して神武に帰順し、饒速日命から伝えられていた大和国統治の印であり、皇位継承の印でもある「瑞宝十種」を献上したとある。

メモ③：橿原宮での神武天皇即位に際して、「宇摩志麻治」が初代天皇神武に献上した瑞宝十種はその後崇神天皇によって、石上神社に遷されて布留大神として祭られている。これが石上神宮の創起である。垂仁になってから祭祀氏族として物部連姓を賜った。

メモ④：平安時代物部氏の子孫によって編纂された「先代旧事本記」の饒速日命の記述は、「日本書紀」よりも詳しく記載されている。大和朝廷成立時の歴史を「記紀」以上に明白に伝えた歴史書といえる。

矢田坐久志玉比古神社（矢田大宮）（矢落明神）

祭神：櫛玉饒速日命・三炊屋媛神 本殿：春日造。重要文化財指定

饒速日命は亡くなられてから櫛玉（神秘的な力を持つ魂の意）の尊称を奉られ、櫛玉または櫛甕玉（くしみかだま）饒速日命という。

創建年代は不詳であるが、6世紀前半までは物部氏の崇敬篤く、畿内随一の名社として栄え、社殿は宏壮美麗を極めたと伝えられる。

「天磐船に乗りて大空を翔び行けり」の古事に基づき、航空祖神として航空関係者の崇敬を集め、9月22日に航空祭が行われている。楼門のプロペラは昭和18年大日本飛行協会から、中島飛行機（富士重工の前身）製造の陸軍91戦闘機のもものが奉納された

饒速日命は豊葦原中つ国平定のため、天照大神から十種の神宝と天羽羽矢を授けられ、三十二武将と25部の物部（軍隊）その他船長や船子など、従者の大軍を引き連れて天磐船に乗って降臨した際、天空を飛翔しながら三本の矢を射ち、矢の落ちた所を宮居と定めた。一の矢は神社南方500m（大字新字一の矢）に、二の矢は境内に、三の矢は神社北方500mに落ちた。このことから社号を「矢落大明神」と称し、この地を「矢田」と呼ぶようになった。

初めに河内国の哮ヶ峰（生駒山北端、磐船神社）に天降り、その後大和の鳥見の白庭山に遷り住んだとされている。

饒速日命と共に降臨した一族の32供奉衆はこの地に定住し、命の没後御霊を安めるために社を建て祭祀を行ってきた。毎年1月8日に神域全面に雄・雌龍の大綱を掛ける「綱掛祭」を行い、命への永遠の側近警護を誓い、子孫の繁栄と豊作を祈っているとのこと。また氏子で宮座を結成し、境内の「舟入神」と称する天の磐船の欠けら石に縄を巻き付けて、お互いの出自を確かめ合っているという。

（メモ：後にこれらの人たちが、大和朝廷を支える豪族あるいは庶民の祖先になったとする。）

